| | |
|---|---|
| 氏名 | 植松　みさと |
| ヨミガナ | ウエマツ　ミサト |
| 学位の種類 | 博士（文化財） |
| 学位記番号 | 博美第502号 |
| 学位授与年月日 | 平成28年3月25日 |
| 学位論文等題目 | 〈論文〉　文化財建造物における障壁画の保存管理に関する研究 |

論文等審査委員

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| （主査） | 東京藝術大学 | 教授 | （美術学部） | 長尾　充 |
| （論文第１副査） | 東京藝術大学 | 教授 | （美術学部） | 光井　渉 |
| （作品第１副査） | 東京藝術大学 | 教授 | （美術学部） | 稲葉　政満 |
| （副査） | 東京藝術大学 | 准教授 | （美術学部） | 荒井　経 |
| （副査） | 文化庁 | 主任芸術文化調査官 | | 上野　勝久 |

（論文内容の要旨）

本研究は、障壁画によって装飾された文化財建造物の空間性の保存を目標とし、障壁画の文化財建造物内部での保存の可能性を検証するものである。文化財建造物における障壁画の劣化損傷要因を解明し、適切な保存管理法を導くことで、目標の実現を目指す。

障壁画の歴史は中世にはじまり、近世初期に城郭御殿の装飾として最盛期を迎えた。障壁画は、室の用途に合わせて技法や画題が選択され、空間の性格を特徴付ける役割を担うようになった。建造物と障壁画は、一体として文化財的価値を形成してきたものである。

近年、文化財建造物内にある障壁画を取り巻く状況が変化し、その保存を目的として障壁画を文化財建造物から収蔵施設へ移す事例が増加している。文化財建造物の空間性の維持という視点から考えると、障壁画の移設は好ましいものではない。

文化財建造物では収蔵施設のように保存環境を整備できず、それが障壁画の劣化損傷に繋がると考えられ、障壁画の移設が進められてきた。しかし、具体的な障壁画の劣化損傷要因や室内環境から受ける影響は検証されておらず、科学的根拠をもたずに移設が進められている現状は問題であると考える。

本論では、文化財建造物における障壁画保存のあり方、その現状と問題点を明らかにしたうえで、障壁画の劣化損傷要因の解明のために事例検証を行い、検討を進める。

論文は、第1章から第5章までの本論と、序章・結章からなる。以下に各章の概要を記す。

第1章では、文化財建造物における障壁画保存のあり方について言及したうえで、国の重要文化財に指定された建造物と障壁画の保存状況を把握し、現状の保存管理上の問題点を抽出する。文化財建造物内の環境は、障壁画保存に適さないと考えられ、障壁画の収蔵施設への移設が進められている。しかし、文化財建造物における障壁画の劣化損傷要因については解明されておらず、障壁画の現地保存を継続していく可能性は残されていると考えた。

文化財建造物における障壁画の保存状況の改善には、障壁画の劣化損傷要因の解明とそれを基にした保存管理手法の提案が必要であると考える。第2章から第5章では、文化財建造物の立地や活用状況、保存管理状況が異なる事例を対象として、障壁画の劣化損傷要因の解明と保存管理の改善法の検討を試みた。障壁画の劣化損傷要因は、建造物の温湿度や光などの室内環境と障壁画の保存状態、保存管理状況、歴史的変遷から検証した。

第2章の好文亭奥御殿は、常時公開施設として活用されていることで開放的な環境に障壁画が置かれている。室内環境は、屋外の気候の変化の影響を受け、変動が大きく、安定的な環境とすることが難しい状況であった。各室の環境も異なり、障壁画の保存状態にも差がみられ、日射を受けている室では本紙の劣化が著

しく、高湿度の室ではカビが発生していた。

第3章の早雲寺本堂は、通常は法要等の宗教行事に使用されるほか、特別公開とコンサートという特別な活用がある。高湿度環境であったため、カビの発生が懸念されたが、日常管理の換気によりカビ被害は最小限に抑えられていた。また、急激な温湿度変化は、屋内外を仕切る建具の開放と多数の入室者による影響が大きいことがわかった。

第4章の興正寺別院本堂は、宗教施設としての使用とともに自由拝観による見学者の入室が不定期にある。障壁画は、南側からすりガラス越しの日射がある影響で南北を比較すると南側で褪色が進行していた。しかし、日射により南側の温度の日較差が多少大きかったものの、急激な温湿度変化はみられず、安定していた。

第5章の正伝寺本堂は、宗教施設であるとともに常時公開施設となっている。障壁画によって、室の四方が装飾されていることで障壁画の形態も多様であった。障壁画の形態ごとに下地構造が異なるほか、設置される環境にも差がある。障壁画の保存状態は、形態の違いによって違いがあり、屋外に近い舞良戸は厳しい環境に置かれていた。

結章では、第2章から第5章の各事例での検証から得られた障壁画の劣化損傷要因を取りまとめ、障壁画を有する文化財建造物において共通して注意が必要な事項を具体化した。それらを所有者や管理者が日常点検に使用できるフローチャートと確認表として提示し、保存管理法の改善や現地保存の継続の可否の判断に生かせるものとした。

文化財建造物における障壁画の劣化損傷は、室内環境変化や保存管理、活用の方法などによって受けた影響が積み重なって進行している。文化財建造物において障壁画の現地保存を継続するためには、問題発生が懸念される箇所を早期に発見し、対策を講じることが不可欠である。適切な保存管理を実施することで現地保存が可能となる事例もあると考えた。

（総合審査結果の要旨）

本研究は、文化財建造物の室内を装飾する障壁画について、保存環境および管理状況の把握を通して、劣化損傷の実態とその要因を明らかにし、現地保存の可能性を検討したものである。

障壁画は、平安時代から住宅建築の内部装飾の主たる要素となり、中世寺院での発展を経て、近世の城郭御殿において盛期を迎えた。障壁画は、技法や画題の選択により、室の格式と性格を表現しており、本来、建造物と一体として価値を形成するものである。近年、障壁画は、その美術的価値を優先する判断から保存環境の整った収蔵施設等に移し、建造物には代替品を収める事例が増えてきている。これはデジタル技術の進展により高品質な複製品が制作されるようになったことで、今後さらに加速するものと予想される。しかしながら、障壁画の移設に際しては、劣化損傷の要因や、室内環境からの影響について十分な検証がなされないままに実施されているのが現状である。

本研究では、紙に描かれた障壁画を研究対象とし、文化財建造物の実地調査により、温湿度や日射等の保存環境や、日常管理の状況を把握し、劣化損傷の要因について検証している。さらに、保存管理の問題点を明らかにし、その対処方策を示すことにより、文化財建造物と障壁画を一体として保存しつづける可能性について考究している。

本論は、序章に始まり、第1章では重要文化財に指定された建造物と障壁画の保存状況を把握した。文化財建造物内で障壁画を保存していくためには、劣化損傷の要因を明らかにし、これに基づく管理手法を確立する必要があることを指摘している。

第2章から第5章の各章では、立地環境や管理状況、活用状況が異なる文化財建造物4事例を対象として、それぞれ室内環境変化の測定や保存状態の確認により、劣化損傷の要因を検討した。さらに、保存管理状況の改善策を提案している。第2章の好文亭奥御殿は水戸市の偕楽園に所在する常時公開施設である。屋外の気候変化の影響が大きく、特に日射による障壁画本紙の劣化が進行していた。建具の開放時刻を遅らせることで日射の影響を軽減できるが、開放的な公開では保存環境の根本的な改善は難しいとしている。第3章の早雲寺本堂は箱根町に所在する宗教施設である。日常は高湿度の状況が続くがカビの発生は限定的であった。年1回のコンサートでは多数の入室者により温湿度が急激に変動しており、これを抑制するためには在室人数を制

限する必要があるとする。第4章の興正寺別院は富田林市富田林伝統的建造物群保存地区内に位置する宗教施設で、自由拝観を行っている。室容積が大きいため温湿度環境の変動は小さいが、日射の影響により南側で金箔や色材の褪色が進行していた。日射を遮ることが肝要であることを指摘している。第5章の正伝寺本堂は京都盆地の北西に位置する宗教施設で、拝観者が多い。襖、壁貼付、舞良戸など建物内の位置や障壁画の形態により劣化損傷に差異が認められ、特に屋外に近い舞良戸は損傷が進んでいたが、環境から受ける影響を軽減することは容易ではないとする。以上の事例における検討結果に基づき、結章では障壁画の劣化損傷における危険因子を取りまとめ、文化財建造物内での障壁画保存において注意を要する共通事項を提示した。とりわけ建造物を健全に維持管理することが障壁画の保存のためにも必須であることが確認された。また、障壁画を建造物内で保存することの可否を判断するためのフローチャート及び確認表を提案した。

これらにより本論では、文化財建造物における障壁画保存の可能性を次のようにまとめている。障壁画の劣化損傷は、日常的な室内環境変化や保存管理と活用の方法などによる影響が積み重なって進行する。問題のある箇所を早期に発見し、対策を講じることが不可欠である。さらに日常的な管理を工夫することで現地保存の継続が可能な場合もある。ただし、科学的な検討から現地保存が困難と判断されれば適切に収蔵することも検討されなければならない。一方で、文化財建造物が有する障壁画の全てを直ちに収蔵施設に移すことはできないのであるから、現地での保存環境をより良く維持することが重要となる。

このように、本研究は文化財建造物における障壁画の劣化損傷の実態と保存管理について、事例調査を通して具体性をもって論じた点で、文化財保存学において学術的意義の深い研究といえる。この成果は障壁画以外の調度品や展示物等の保存にも敷衍することができるであろう。ただし、保存環境の科学的指標としては、換気や対流を含めた空気環境の評価や、温湿度変化に対する日射の影響分析などさらなる研究の余地があり、今後の課題といえる。しかしながら、こうした成果は建造物の管理における共通項と考えられ、文化財建造物の保存と活用に有益な研究と思われる。

以上から、本研究は独自性と信頼性があり、博士論文として充分な内容を有していると判定し、合格とした。

なお、第2章は「文化財建造物の室内環境と障壁画の経年劣化－水戸偕楽園内好文亭奥御殿を対象として－」（『日本建築学会計画系論文集』2015年1月号）として、第3章は「文化財建造物における障壁画の劣化損傷要因の検討－神奈川県箱根町指定文化財早雲寺本堂を事例として－」（『同論文集』2015年11月号）として、学会で発表されている。